

●サンゴ礁の人々

海底から生長してきたサンゴ礁の島にココヤシが植えられ、それが根をおろす。島に名が与えられ、神話や伝承が語りかけられる。そうして、はじめて人間の世界が始まる。無文字社会の歴史は口頭伝承と分ちがたく結びついている。その保存と継承は音楽によってなされる。クック諸島のプカプカ環礁の島に住む人々にとってチャントをつくり、歌うことは歴史を語ることにほかならない。しかし、その物語はけして筋立てて語られるわけではない。ただ単に、事柄を想起させるだけで、簡単な参照や輪郭、あるいは速記的のでも云えるような一種のカatalogue的表現によって暗示するだけである。頻りに用いられる比喩や隠喩は分かりにくく、歌詞の言葉も普通の会話体とは異なり、極めて様式化している。チャントは今でも盛んにつくられているから、その数をかぞえ上げることは難しい。おそらく、数百になるだろう。海の中の貧しい砂の上に単調な生活を送る人々が、かくも多様で内容豊かな伝承と音を紡ぎ出していることに心揺さぶられる思いがするのである。



まれた音楽である。クック諸島に導入される前に同じ東ポリネシア文化に属するタヒチの音楽が基礎にあるから、キリスト教の普及とともに、それぞれの島で独得なイメネ・トゥキがつくられるようになった。

●楽器と踊り

音楽の演奏や踊りに欠かせない主要な楽器は木製の割れ目太鼓 nawa とサメ皮の太鼓 payu mago である。今日では木製の割れ目太鼓よりもずっと大きな音量を出す空の石油缶 tini が、割れ目太鼓を先導する重要な楽器になり、スティックも長く太いものが使われるようになった。

これらの楽器を用い、踊りをともなうものには パタウタウ patautau やウパウパ upaupa ウラパウ urapua などがある。土着の要素、おそらく、カパと呼ぶ音楽と踊りが外来の要素と融合して出来た形式で、チャントと太鼓と踊りのはげしく、華やかなリズムをもつ。歌い手たちが輪になって坐り、一人の男の踊り手を取り囲む。手を叩き、膝を打ち、腕を交差させて、パーカッシヴな踊りがくりひろげられる。

●音楽の社会的機能

チャントを歌い、太鼓を叩き、踊ることによって、人々は各集団のレベルで固有の文化を共有し、文化的象徴をつくり、継承する機会をもつ。キリスト教を受け入れて以来、音楽のスタイルはかなり変化したとはいえ、それは創造性に富んだものであり、伝統的な社会的機能に基本的な変化は認められない。例えば、競技の相手に対抗心を燃やしたり、反社会的な行動を非難したりするときには、即興的なチャントによってなされるが、それに用いられる引用や冷やかしの表現は、実にユーモアにあふれたもので、その優れたセンスが才能として評価されるような仕組みをみることができる。また、音楽の演奏によって、小さな社会の中で起こりがちな緊張や諍いを無事に解消するような機能は、古くから伝えられてきたものではないだろうか。実際の戦争や暴力的な抗争がこの島にはなかったことは、おそらくこのような音楽的な安全弁の機能が働いていた可能性がある。小さな孤立した社会での人間関係を維持するための機能として、チャントのもつ役割が失われたわけではない。

注目すべきは、キリスト教の讃美歌であるイメネ・ツキの歌詞のなかに、今では語られることのなくなった神話や伝承が組み込まれるようにして、よく保存されていることである。讃美歌を精査して、キリスト教導入以前の伝統的な文化を探し出す作業が残されている。

●社会的創造

今日、若い世代の労働移住によって、島を離れて暮らす人口の方が、島に居住する人口よりも多くなった現状を考えると、伝統的な音楽形式の継承が難しくなっていることは否めない。ギターやウクレレなどの楽器の採用、ビデオなどの普及による音楽変化だけではなく、踊りの組み立てにも変化がみられる。しかし、その一方で四年に一度開催される太平洋諸国の芸術祭や首都ラロトンガで開かれるクック諸島全体のコンペティションで、島ごとの音楽の特徴が求められる傾向があり、そうしたことが民族的な音楽に再興の機会を与えていることも間違いはない。西欧文化と接触して以来、混合と創造の過程でつねに新しい形式が生み出されて来たように、現在、さらに新たな音楽的創造の段階に入ったと云うことが出来る。



近森教授のスケッチ

●音楽の形式

伝統的なチャントには二つの音楽形式がみとめられる。長く単調な二拍子で詠唱するマコ mako (詠唱歌) と、短くリズムをもって三拍子で朗唱する形式チラ tila (朗唱歌) である。ともに特徴的な多音楽 (ポリフォニー) と和声的ハーモニックな歌唱スタイルをもっている。マコはどちらかという、宗教的、あるいは、あらたまった場合に歌われる。楽器を用いることはなく、踊りもともなわない。これに対して、チラは日常的な明るい雰囲気をもっている。歌われるチャントが太鼓のリズム導き出し、それが踊りの身振りを誘い、それがチャントに内容を与える。チャントと太鼓と踊りの三つの要素が相互に引き出し合う総合芸術であると云ってもいい。

●教会と音楽

日常生活で最も大切な歌唱はイメネ・トゥキである。イメネは hymn のポリネシア語訛、トゥキは歌の中で男性が鳴らす短い喉頭音を指す。タヒチで宣教活動を開始したロンドン伝道教会が1823年にクック諸島南部のアイツタキ島に到来し、導入された教会の讃美歌がもとになっている。イメネ・トゥキは讃美歌とは云っても、伝統的なマコを基礎に出来上がっていると考えられ、讃美歌のヨーロッパ的な音調が島の伝統的な多声的ポリフォニックな声楽と結合して生

*ちかもり、まさし 慶應義塾大学名誉教授 文学博士 専攻 考古学・サンゴ礁学・民族学 著書：『サンゴ礁の民族考古学』(雄山閣)1988年 『サンゴ礁の景観史』(慶應義塾大学出版会)2008年 『サンゴ礁と人間』(慶應義塾出版会)2013年 『キキ自伝—未開と文明のはざままで』(訳) 学生社1978年 JICAとの関係：海外技術協力センター講師(‘65年まで)カンボジア王国派遣コロンボ・プラン専門家(‘65~‘67年)日本青年協力隊技術専門委員(‘06年まで)シニア海外ボランティア技術専門委員(‘06年まで) 海外学術調査：ソロモン諸島西北部・レンネル島、バブア・ニューギニア、ニューカレドニア、フィジー、ウォリス諸島、クック諸島、バヌアツ共和国、フランス領ポリネシア、マーシャル諸島、ツバル国、オーストラリア・ノーザンテリトリー、カンボジア王国、タイ国ウドンタニ県、台湾・蘭嶼など。